



TITLE:

表紙・目次・修士論文要旨・研究室だより・奥付

AUTHOR(S):

CITATION:

表紙・目次・修士論文要旨・研究室だより・奥付. 地域と環境 2016, 14

ISSUE DATE:

2016-12-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/224934>

RIGHT:

地域と環境

No.14 2016.12

Region and Environment

山村 亜希：犬山城下町の空間構造とその形成過程	1
小島 泰雄：延吉農村における朝鮮族の移動性と農地の流動化	25
長島 雄毅：幕末の丹波国馬路村「宗旨御改帳」にみる 住民の労働移動の特徴	37
石田 曜：中国の人文地理学における余暇研究の成果と動向 —都市部を中心に—	51
潘 藝心：計画経済期における南京の工業用地の拡大： 消費都市から生産都市へ	63
劉 天野：中国北方都市の商業に関する近年の研究展開	79
権藤 拓樹：近代以降のミュンスターにおける都市化の過程	95
小方 登：中央アジアにおけるテパの分布と形態（その2） —2015年度ウズベキスタン調査から—	109

書 評：金坂清則著『ツイン・タイム・トラベル イザベラ・ バードの旅の世界 In the Footsteps of Isabella Bird: Adventures in Twin Time Travel』（小林 繁男）	123
博士論文要旨	129
修士論文要旨	131
研究室だより	135

博 士 論 文 要 旨

2015 年度

道州制をめぐる地域論的研究

—行政地域のスケールと階層構造に着目して—

上 野 莉 紗

本研究は日本の行政領域を大きく組み替えるものとして関心を集めている道州制について、その問題性を地域論の視点から検討したものである。本論文は3部6章から構成される。

第Ⅰ部では研究史を展望した。第1章では行政地域をめぐる地理学的研究を整理し、市町村合併などの地域の再編が、新たな地域性を生み出したと同時に、紛争をもたらしたことを確認した。第2章では道州制をめぐる研究について、政治家や行政担当者によってなされた議論も視野に入れつつ整理を行い、道州制が長く議論されてきた構想であること、繰り返し様々な文脈で争点化されてきたことを確認した。さらにこうした研究の多くは制度設計に重点を置き、地域への顧慮が不十分であったことを指摘した。

第Ⅱ部では道州制をめぐる議論について考察した。第1章では過去から現在に至る道州制をめぐる提言を網羅的に取り上げて整理し、道州スケールの地域の役割が国の出先機関から地方自治体へと変化した、階層数は3層から2層へと変化していることを確認した。また、戦前・終戦直後の道州制をめぐる議論が統治と自治の観点から道州スケールの地域の役割を論じたのに対し、平成以後の議論ではこのような検討がなされなくなったことを確認した。第2章では、国や地方で道州制がどのように議論されているのか、九州を事例とした提言分析や聞き取り調査に基づき検討した。道州制の議論は国政の影響を強く受け、しかも構想レベルの議論であることから、実務に追われる個別の自治体において検討を進めているのは大規模自治体にとどまること、その一方で、知事会など

の政策連合組織によってすでに広域行政が進められていること、道州を連合体ではなく地方自治体とする必然性が明確でないことを確認した。また、平成の市町村合併が中山間地域において進まなかったことから、道州制にともなって権限委譲される基礎自治体側の体制が未整備な部分を残していることを確認した。

第Ⅲ部では地域論の視点から道州制を論じた。第1章では、地域の存在様式に対して道州スケールがどのような意味を持つのか、九州を事例に形式地域と実質地域の両面に着目しながら検討した。形式地域については、地方出先機関や各種団体、マスコミなどの管轄範囲をスケールごとに一覧化して、九州・沖縄8県と各県単位にそれらが集中すること、地方出先機関だけでなく地方団体や経済団体、企業に至るまで、地域区分を重層させながら制度が設計されていることを確認した。実質地域については、人口移動に関するセンサス・データを用いて複数の地図を作成し、日常的な都市圏を反映する通勤・通学流動は、ほとんど府県境界を越えることはなく、長期的な人口再生産の圏域を示す移住も県庁所在都市を中心としていることを確認し、道州が自治体として適切なスケールであるかという点については疑問が残ることを指摘した。第2章では道州のスケールを諸外国における行政領域のそれと比較検討した。アメリカ、韓国、フランス、ドイツなど、先進国から9カ国を選び、その行政体系を階層構造として整理した上で、広域行政について人口・面積に着目して比較し、諸外国においては府県と類似した人口規模を有する行政体が多く、道州スケールの行政領域をもつものはむしろ限られていること、行政階層が道州制で想定されるものよりきめ細かく設定されていることを指摘した。

以上のように、道州制をめぐる議論は、統治の論理から論じるものから、自治の論理に基づくも

のへと変化してきたが、地域そのものを議論に取り込むことは十分に行われてこなかった。この問題意識からすると、地域の主体的な取り組みが想定されている道州制は、九州における地域の実態的な検討が示すように、スケールとしては過大であるとみなされる。そして海外の地方行政制度を参照すると、地域の重層性に応じた制度設計が必要であると考えられる。

修 士 論 文 要 旨

2015 年度

1870 年以降のミュンスターに おける都市化と旧市街

権 藤 拓 樹

都市の個性の形成過程を都市プランの変遷に求め、1870 年以降のミュンスターの都市化を辿ることで、都市の個性を明らかにした。ミュンスターの都市化は 1870 年に始まる近代化以降加速し、拡大一辺倒ではない都市化をみせてきた。その都市化に、既存のモデルを適用することで、都市化、郊外化、都心回帰という過程を経ながらも、旧市街は独自の発展をとげ、回帰する人口はその周辺、都心環状区へと移り住んでいくことがわかった。都市交通によるモデル化の観点からは、かつての歩行者時代から自動車時代へと変遷し、近年では新たに歩車分離の時代へと至っていることが確認された。これは、それまでの自動車に適合する都市づくりを進めた周辺地域と、その反省の上に立つ人間的な都市づくりの時期に、歴史的な都市プランを維持・保全してきた旧市街とが有機的に結びついた結果であった。また、機能と不可分に結びついている形態の維持・保全は、これからの都市化を規定する効果をもつ。その点で、歩くことを前提としたミュンスターの旧市街は、歩車分離の時代における歩行者空間という現代的な機能に適合し、新たな意義を獲得している。市民意識としても、都市計画上も中世的な街並みに価値づけがなされていた旧市街であるが、その維持・保全とは特定の時代に都市を止めてしまうことではなく、歴史的な連続性を守ることである。そうすることで、中世以来、宗教や商業、行政など様々な役割を担ってきたミュンスターの旧市街に、時間的・空間的・機能的な多様性を集積させ、現在の都市生活にも多くの可能性を提示している。そうした連続性にこそ、都市の画一化が進む現在でも

失われない都市の個性が育まれるのであり、それが人々を引きつける都市の魅力ともなっている。

日本沿岸漁業における 海洋資源管理と漁民信仰

—京都府伊根町を事例として—

高 倉 ニルス

本研究は、江戸時代まで典型的だった日本漁村の景観を保全しており、地理的条件においても特殊性の高い京都府伊根町を対象地域に定め、海洋資源管理の実態とエビス信仰に現れる民間漁民信仰を捉えるべく、それらの関連性・相互性を人文地理学的視点から明らかにし、日本国内で育まれてきた独自の漁業管理体制について考察することを目的とする。

対象とする地域である京都府伊根町は、全国各地の漁村と同様に人口流出や高齢化が加速しつつある上に、第一収入源である漁業も慢性的な海洋資源低下に悩まされている。消費中心地から隔離された小規模地方自治体として存続できるよう、漁業を振興しなければならない中、地元に伝わる年中行事が村内のコミュニティ結成の一翼を担っており、厳しい現実に立たされる中で信仰の要素は今、どれほど町民の意識に浸透しているかを参与観察やアンケート調査を通じて実証を試みた。分析の結果、日本独自の排他的かつ自主的漁業管理の典型的なあり方は伊根町でも著しく、漁協会員が担当するエビス祭をはじめとした年中行事はもちろん、漁労技術の進化にとらわれず、一定の民俗知の伝承がなされていることが分かった。しかし、そうした知恵に深い造詣を有する町民は少なく、ベテラン世代の漁師を中心に知識が集中する偏向も明らかになり、その一因として新規漁業者の深刻な不足が挙げられる。同時に、不漁問題も嘆かれるが、その裏に漁師自らの乱獲が隠れて

いる可能性もあるとの想定に至った。一方、資源管理に関する側面においては、農林水産省を先頭に、政府が実施している若手育成事業と海外漁業国の成功例に習った資源管理における現場—行政連携とともに、持続的な漁業の実現に向けた教育体制・設備投資が国内外で評価される日本の「地元任せ漁業」を蘇らせると考えられる。

ウクライナの総合的地域区分

—州の共通性に着目して—

寺 岡 郁 夫

ウクライナでは東西の2つだけでなく、いくつかの地域に分かれていると考えられる。本論文の目的はウクライナの地域性の違いを理解することである。そのために、ウクライナ全体を対象地域として、4つの項目による等質地域区分を行い、さらにそれらを総合した地域区分を行い、区分したそれぞれの地域について地誌的記述をする。第I章で先行研究を整理し、研究方法について説明した後、第II章では、ウクライナの地理の基本情報や歴史について概観し、ウクライナにおける地域区分の過程についてまとめる。今までの研究者の地域区分により、ウクライナでは6つの地域に共通性が強いと考えられる。第III章では、州を区分の単位として、自然、人口、産業、資源の4つの項目について、地図や統計資料を参照しながら地域区分をする。また人口50万人以上の都市を核として設定する。そして地域区分した4枚の図を等しい透明度で重ね合わせ、その色の近似性により地域の共通性を見出す。その結果、6つの地域に分けられ、そのうち西部地域ではさらに3つのサブリージョンに分けられる。第IV章では、区分された地域についての記述をする。西部地域では多様な自然が広がり、農業が盛んである。中央部地域には最大の都市であるキエフが位置するものの、最も統一性の低い地域である。南部地域は沿海部にあり、天然資源に恵まれない。北東地域は森林

ステップに位置し、大都市ハルキウが存在する。南東部地域ではドニエプル川沿岸に多くの産業都市があり、クリビーリフ鉱山がある。東部地域はドンバスともいわれ、石炭業と鉄鋼業の中心地である。以上より、ウクライナには多様な地域が存在し、首都キエフには強い求心性がありながら、周縁部の地域の共通性も強いことが明らかになっている。今後の課題としては、ウクライナと他地域との関係や、ウクライナの地域の形成過程について理解することである。

中心市街地における 商業分布の日中比較研究

—長春と京都を例として—

劉 天 野

近年、「東北旧工業地帯の復興」と中国都市の「退二進三（第二次産業を郊外に移し、都心部に第三次産業を発展させる）」という発展戦略の下で、長春市の都心部は大きく変化しつつある。しかし現状は、都心部に歴史的遺跡が残存するが、まだ活用されていない。それに対して、京都市は都心部が成熟しており、多数の歴史的遺跡と商業施設の共存しており、このことは長春市にとって参考になる。また、各種の商業施設の相関性も都心部の再開発に対して重要だと考えられるが、中国の都市地理学と経済地理学においては、商業集積に関する研究が多いものの、各種の商業施設の相関性についての研究は限られている。そのため、本研究では、長春市と京都市の中心市街地における商業施設の分布を比較し、ポイントパターン分析を行なって、計量的な考察をした。また、先行研究を踏まえて、中心市街地における商業施設の集中地域の変化と現状を形成する要因についても検討した。結果として、両都市は、共に中心市街地において、3つの商業集積地が形成されることが明らかになった。長春市の商業施設が水平的に展開することに対して、京都市は垂直的に展開する傾向

が強いといえる。また、その形成要因について、長春市の商業集中地域は歴史的影響と政策からの影響が強く、京都市の場合は交通インフラストラクチャーの建設と観光からの影響が強いと考えられる。課題として、本報告では中心市街地の外部からの影響を考慮することが挙げられる。京都市の観光資源は商業分布が影響すると考えられるが、そのことについて計量的分析をするに留まった。今後は、ポリゴン、ポリラインを利用し、商業集積地の析出に関する方法も検討すべきと考えられる。

地球観測衛星データを用いた 移動経路推測の事例研究

—最小コストパスモデルに基づいて—

龐 岩 博

本研究では、歴史地理学において GIS と衛星画像を活用することで、経路シミュレーション手法としての最小コストパス分析を C++ による分析プログラムを開発し、実データへの適用を通しその有効性を示し、さらに玄奘法師の旅の事例を通して、過去に存在した移動経路の推測手法構築を目的とする。研究方法としては、第1に最小コストパス分析方法の枠組みを明らかにして、DEM データを用いて最短時間経路を求めるプログラムを開発した。第2に経路復原研究の特性を捉え、標高データと地表面の物理状態を表す土地被覆分類データを統合し、かつての経路推測に適用できる最小コストパス分析方法を提案した。また、玄奘法師の西域の旅を事例として経路推測を行い、具体的なコスト評価方法とパラメータ設定方法をめぐって、最小コストパスモデルによる推測した経路の適合度を検討した。分析の結果により、複数のデータセットの結合方法に関して、これまでに使われている重み付け加算方法と比べて、地面の傾斜角による移動への抵抗と土地被覆種類の違いによる歩行者に与える影響を同一モデルに取り込む評価方

法は、より正確な移動コストが得られることを明らかにした。こうしたコスト評価方法に基づいて、数値標高モデルと土地被覆分類図を併用して行われた最小コストパス分析は、現実に存在している経路検出モデルの精度を向上させ、かつて存在した経路の復原研究への有効性が確認できた。さらに、対象地域の一部路線を基準として、走行速度や各土地被覆種類の係数などのパラメータを逐次変更し、最適な設定方法を推定した。こうした諸側面から、経路の推測方法とした最小コストパス分析の有効性を考察し、かつての道路・移動路線の復原研究におけるコンピュータ上でのシミュレーションの展開の可能性を広げて、今後のさらなる検討により歴史地理学に寄与することを確認した。

研究室だより

(2015 年 1 月～2016 年 12 月)

2015 年

・1 月 11・12 日

小島は東北科研調査のワークショップ「フィールド調査にもとづいて延吉の地域構造を考える」を人環棟 437 室で開催した。

・2 月 22・23 日

科研プロジェクト「前近代中国における交通路と関津の環境史的研究」(基盤 (B):代表者・福原啓郎京都外国語大学教授)の研究集会が滋賀県彦根であり、小方、小島が参加した。22 日には不破関跡を見学した。

・2 月 28 日

『人文地理』67 巻 1 号に以下の論文が掲載された。長島雄毅「近世後期京都における商家奉公人の雇用と再生産—平野屋遠藤家を事例として—」(1-19 頁)。

・3 月 8 日

2014 年度第 2 回巡検が、「京都の環境と近代化」と題して行われ、京都市歴史資料館、島津創立記念資料館、琵琶湖疏水記念館、無鄰菴などを巡った。(担当:春日あゆか)

・3 月 13～20 日

小方は科研プロジェクト「衛星データを利用した中央アジア・西アジアにおける歴史的集落の立地と形態の研究」(基盤 (C):代表者・小方)の一環として、キプロスで調査を行った。

・3 月 14 日

大阪大学で開催された日本人口学会関西地域部会 2014 年度研究報告会において、以下の発表が行われた。長島雄毅「江戸時代後期の京都における商家奉公人の雇用」。

・3 月 24 日

地球環境学舎人間環境共生論分野の夏目宗幸、森下翔太が修士(地球環境学)の学位を授与さ

れた。

植田嶺、竹林朋子、高坂魁が京都大学学士(総合人間学)を授与された。

・3 月 26 日

小島は、調査報告書『中国東北における地域構造変化の地理学的研究—松原調査報告—』(地域空間論分野)を編集発行した。この中で、小島は「前郭灌区の水田開発」(60～70 頁)を、石田曜は「吉林省松原市の都市公園・広場にみるレジャー空間の特性」(36～46 頁)を執筆した。

・4 月 1 日

人間・環境学研究科、地域空間論分野の准教授として山村重希が着任した。専門は歴史地理学。

・4 月 7 日

平成 27 年度の大学院入学式が開催された。本年度は、修士課程に、柴倫加甫斯琴、銭佳輝(指導教員小方)、竹林朋子、谷口晴彦、楊曉丹(指導教員小島)が入学した。博士後期課程に潘藝心(指導教員小島)が編入学した。

・4 月 20 日

山村が分担執筆(「現実世界の歴史地理」183-201 頁)した『人文地理学への招待』(竹中克行編著、ミネルヴァ書房)が出版された。

・4 月 25 日

金城学院大学サテライト多目的室で開催された経済地理学会中部支部 6 月例会において、以下の発表が行われた。石田曜「中国都市におけるレジャーの場所とその構築—吉林省の公園・広場を事例に—」。

・5 月 9 日

長島雄毅は、(有)関西教育考学が企画する「京大知的好奇心学講座」に参加し、「江戸時代後期の商家奉公人の雇用と移動—京都の商家の場合

一」と題して、兵庫県播磨高等学校の生徒を対象にした遠隔授業を行った。

・5月30日

小方は、共著者として以下の論文を刊行した。
N. Ogata, Z. Yu, T. Ito, H. Sohma, K. Ideta 2015.
'A Study of Settlement Remains near the Qiomo Oasis in Northwestern China using Satellite Imagery and DEM', 奈良女子大学地理学・地域環境学研究報告Ⅷ, 9-29.

・6月3日・7月29日

山村は、あいち観光戦略検討会議（愛知県）に出席し、愛知県の観光戦略について指導助言を行った。

・6月6日

京都府立大学で開催された日本公共政策学会第19回研究大会において、以下の発表が行われた。上野莉紗「道州制に類する構想の歴史的変遷—都道府県とその改編をめぐる構想の変遷をふまえて—」。

・6月27日

愛知大学名古屋キャンパスで開催された経済地理学会中部支部6月例会において、以下の発表が行われた。上野莉紗「地方行政制度の階層構造と地方自治体の性格・規模に関する国際比較—道州制論議を念頭に—」。

・6月28日

山形県立米沢女子短期大学で第58回歴史地理学会大会が開催され、小島は「近代中国の山西における村制の地理的基礎」と題する発表を行った。

・7月5日～10日

英国・ロンドンの王立地理学協会を会場として International Conference of Historical Geographers 2015 が開催された。山村は、5日の Plenary Session で 'Comments from the Viewpoint of *Historical Geography*' と題したコメントを行い、10日に 'Silver, Timber and Rice: Regional Industries and the Modernization of

Port-town Landscapes in Japan' と題して口頭発表を行った。小方は 'Study of the location and plan of Hellenistic and Roman cities in the Near East' と題して7日にポスター発表を行った。

・7月11日

2015年度第1回巡検が、「京都とキエフ」と題して行われ、京都府立植物園、深泥池、四条通、京都市国際交流会館、京都市役所前広場などを巡った（担当：寺岡郁夫）。

・7月16日

山村は、史跡中須東原遺跡保存管理計画検討部会（益田市教育委員会）に出席し、同管理計画策定について指導助言を行った。

・7月22日

タイ王国・チェンマイ大学地理学教室の一行が研究室を訪問した。

・7月24日

京都大学で開催された東方キリスト教圏研究会第5回例会において、以下の発表が行われた。寺岡郁夫「2013-2014年ウクライナ滞在記—キエフ・マイダンを中心に—」。

・8月

小島の「成都地図近代化的展開」が掲載された孫遜・陳恒編『城市史与城市研究：都市文化研究12』上海三聯書店、150-161頁、原文中国語；鍾獅訳）が発行された。

・8月3日

山村は、甲賀市水口岡山城跡調査委員会（甲賀市教育委員会）に出席し、調査について指導助言を行った。

・8月6～23日

小島は科研費「中国華南の地域構造の再編に関する地理学的調査研究」（基盤研究B 海外学術調査）による広州・香港におけるフィールド調査を行った。

・8月19日～21日

山村は、科学研究費「港町景観の近世化プロ

セスに関する歴史地理学研究」(基盤研究C:代表・山村)の一環として、広島市で開催された第10回中世都市・流通史懇話会に出席し、文献史学・考古学等の研究者と討議を行った。19日には近世広島城下町、21日には地御前、廿日市、草津湊などの中世安芸の主要市町・港町の巡検に参加した。

・8月25日

山村は、岐阜市長良川流域の文化的景観検討委員会(岐阜市教育委員会)に出席し、整備基本構想等について指導助言を行った。

・8月27日

山村は、犬山城城郭調査委員会(犬山市教育委員会)に出席し、調査について指導助言を行った。

・8月28日

山村は、史跡美濃金山城跡保存管理計画策定委員会(可見市教育委員会)に出席し、計画策定について指導助言を行った。

・8月31日・9月1日・7日・8日・14日

山村は、非常勤講師として愛知県立大学に出講し、集中講義(「資料調査法」)を行った。その一環として戦国期尾張の城と町(小幡・守山、小牧、鳴海・大高)の巡検を企画・実施した。

・9月8日

山村は、彦根市佐和山城跡総合調査検討委員会(彦根市教育委員会)に出席し、調査について指導助言を行った。

9月12・13日

小島はUNITY共同研究助成によって津山市において、岸田吟香にかかわる資料収集を行った。

・9月13日

山村は、京都大学ジュニアキャンパス2015にて、「地理学—地図を読む・歩く—」と題して読図と巡検のゼミを企画・実施した(中学生18名が受講)。

・9月14～17日

豊田哲也徳島大学総合科学部教授が「地域空間論Ⅳ」「経済空間論」の集中講義を行った。

・9月18日・19日

山村は、科学研究費「港町景観の近世化プロセスに関する歴史地理学研究」(基盤研究(C):代表・山村)の一環として、大阪市立大学中世史研究会とともに、安芸厳島の門前町・港町の調査及び巡検に参加した。

・9月18日～20日

愛媛大学で開催された2015年日本地理学会秋季学術大会において、以下の発表が行われた。長島雄毅「明治時代初期の京都における住民の奉公先—下京第四区の事例—」。

・9月20～28日

小方は科研プロジェクト「衛星データを利用した中央アジア・西アジアにおける歴史的集落の立地と形態の研究」(基盤(C):代表者・小方)の一環として、ウズベキスタンで調査を行った。

・9月25～30日

山村は、非常勤講師として愛知県立大学に出講し、集中講義(「地域に学ぶ」)を行った。その一環として近世名古屋城下町の巡検を企画・実施した。本研究室修了生の市澤泰峰氏(名古屋市教育委員会)に名古屋城をご案内頂いた。

・9月26日

追手門学院大学大阪城スクエアで開催された第8回日本公共政策学会関西支部研究大会において、以下の発表が行われた。上野莉紗「道州制をめぐる全体論的・地域論的研究」。

・10月19日

山村は、中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討会(文化庁)に出席し、全国の中近世城郭遺跡の評価と調査の方針、課題について助言を行った。

・10月20日

山村は、長浜市史跡等保存活用委員会(長浜市教育委員会)に出席し、戦国期小谷城・城下町の調査について指導助言を行った。

・10月21日

神戸市学園都市のUNITYで開催された共同研究会で、小島は「岸田吟香の日中交流」と題する報告を行った。

・10月22日

山村は、二俣城跡・鳥羽山城跡調査検討会（浜松市）に出席し、調査について指導助言を行った。

・10月26日

西安交通大学人口与発展研究所の一行が研究室を訪問した。あわせて研究室の主催で「中国の農民工と高齢者－西安交通大学人口与発展研究所の研究成果－」と題する講演会を百周年時計台記念館で開催した。

・10月27日

上野莉紗は、霧島市民会館で開催された第6回日本ジオパーク全国大会において、パネリストをつとめた。

・10月29日～11月2日

潼関科研の一環として中国での調査が行われ、小方、小島が参加した。

・10月31日

山村は、科学研究費助成事業「中世・近世移行期における守護所・城下町の総合的研究」（基盤研究（A）：代表者・仁木宏大阪市立大学教授）の研究分担者として、葛城市で開催された研究集会「16・17世紀大和における都市と権力－城下町・陣屋町の成立と変容－」に参加した。

・11月7日

2015年度第2回巡検が、「京都のパン屋から世界をみる」と題して行われた。（担当：権藤拓樹）

・11月14日・15日

大阪大学豊中キャンパスで開催された2015年人文地理学大会において、以下の発表が行われた。石田曜「余暇の経験による場所の構築－中国瀋陽市中山公園を事例に一」。潘藝心「南京を中心とする地域における都市化（1912-1949）」。また、特別研究発表において竹林朋子が書記を務めた。

・11月24日

地球環境学舎人間環境共生論分野の布施綾子が博士（地球環境学）の学位を授与された。

・11月26日

山村は、長久手市文化財審議会（長久手市）に出席し、同市の文化財の指定について討議を行った。

・11月29日

京都大学で開催された東方キリスト教圏研究会第8回例会において、以下の発表が行われた。寺岡郁夫「ウクライナの地域編成論」。

・12月

『総合人間学部広報』（No.55, 人間・環境学研究科 総合人間学部 広報委員会）に山村の「京大での講義を通じて」（16頁）が掲載された。

・12月9日

小島は城陽市の総合計画策定に関わる市民まちづくりワークショップ第1回にコーディネーターとして参加。翌年8月まで計8回のワークショップ運営に携わった。

・12月12日

高大連携事業「京都大学キャンパスガイドGLHS10」で来校した大阪の高校生に、小島は「一人っ子政策はどうなるのか－中国を地理学的に考える」と題する講演を行った。

山村は、平成27年度犬山市民総合大学（犬山市教育委員会主催、於犬山国際観光センター）において、「地図から考える犬山城下町」と題した講演を行った。

・12月13日

山村は、家康サミット三都物語「家康の城と城下を考える－岡崎・浜松・駿府－」討論会（浜松市主催、於アクトシティはままつ）に参加し、歴史地理学の立場からコメントした。

・12月14日

山村は、史跡岐阜城跡整備専門委員会（岐阜市教育委員会）に出席し、調査について指導助言を行った。

・12月19日

長島雄毅は、京都府教育委員会・京都市教育委員会・京都大学の共催による高大連携事業「京都大学ウィンターミーティング〜グローバル時代の学び探求〜」に参加し、「江戸時代の庶民の生活ー京都における商家奉公人の雇用からー」と題して、京都大学において、連携指定校の生徒を対象とした授業を行った。

・12月19・20日

小島は華南科研の国際ワークショップ「フィールド調査に基づいて広州の地域構造を考える」を百周年時計台記念館において開催した。

・12月20日

山村は、京都府立宮津高校にて「宮津城下町を読む・歩く」と題して講義と巡検を行った。

・12月29日

山村は、「北白川の歴史地理」と題して、参加者17名で、田中、北白川、浄土寺地区の巡検を行った。

2016年

・1月5日

鍾獅上海師範大学人文與伝播学院教授を招聘外国人学者として小島が受け入れた。期間は3月23日まで。

・1月29日・7月22日・12月19日

山村は、史跡美濃金山城跡保存管理計画策定委員会（可児市教育委員会）に出席し、計画策定について指導助言を行った。

・2月1日・5月2日・6月27日

山村は、甲賀市水口岡山城跡調査委員会（甲賀市教育委員会）に出席し、調査について指導助言を行った。

・2月2日

柴彦威北京大学教授を招き、「中国における都市地理学研究」と題する講演を、人環棟233教室で開催した。

・2月3日

上野莉紗の博士学位審査に関する公聴会が開催された。

・2月16日・7月11日

山村は、岐阜市長良川流域の文化的景観検討委員会（岐阜市教育委員会）に出席し、整備基本構想等について指導助言を行った。

・2月17日・7月13日

山村は、犬山城城郭調査委員会（犬山市教育委員会）に出席し、調査について指導助言を行った。

・2月21日

山村は、大内氏関連町並遺跡発掘25周年記念特別展（山口市教育委員会主催、於山口市歴史民俗資料館）において、「中世の山口と防長の都市」と題した講演を行った。

潼関科研のワークショップ「前近代中国における交通路と関津の環境史学的研究」が京都外国語大学で開催され、小島が「黄河故道の復原をめぐって」と題する報告を行った。

・2月21日～23日

山村は、学部生・院生とともに、山口、萩城下町、小倉城下町、港町門司・下関の巡検を行った。

・2月23日

山村が2015年7月5日のInternational Conference of Historical GeographersのPlenary Sessionで行ったコメントを執筆した共著Yamamura, Aki, Cameron, Laura, Forsyth, Isla and Novaes, Andre Reyes, 'Historical geography as an international discipline 1975-2015: responses' (284-288頁)が、The Geographical Journal 182-3に掲載された。

・2月24日

山村は、彦根市佐和山城跡総合調査検討委員会（彦根市教育委員会）に出席し、調査について指導助言を行った。

・2月27日

愛知大学豊橋キャンパスで開催された第3回

越境地域政策フォーラムにおいて、以下の発表が行われた。上野莉紗「歴史的・地理的条件に着目した越境地域政策の比較研究—環霧島地域と三遠南信地域を中心に—」。

・3月2～9日

小島は潼関科研によるフィールド調査に参加し、潼関地域の遺跡と淳化県直道遺跡、洛陽を参観した。

・3月7日・10月5日

山村は、長浜市史跡等保存活用委員会（長浜市教育委員会）に出席し、戦国期小谷城・城下町の調査について指導助言を行った。

・3月13日

小方はフェニキア・カルタゴ研究会の第2回公開報告会（於放送大学東京文京学習センター）で「衛星画像と地形データでみるフェニキア・カルタゴの都市の立地」と題して発表した。

・3月15日

山村が執筆した「戦国城下町の「かたち」が意味するもの」（知の息吹、24-27頁）を掲載した『人環フォーラム』第35号が発行された。

・3月21日

日本地理学会2016春季学術大会が早稲田大学で開催され、小島は「広州近郊農村における経済発展と文化復興」と題する報告を行った。

・3月23日

上野莉紗が京都大学博士（人間・環境学）の学位を授与された。寺岡郁夫、権藤拓樹、高倉ニルス、龐岩博、劉天野が京都大学修士（人間・環境学）の学位を授与された（論文要旨は本誌に掲載）。また、北西諒介、吉良和也、近藤結衣、佐竹秀太、室田定政、米田剛が京都大学学士（総合人間学）を授与された。

・3月25日

山村は、浜松市の調査の一環として、学部生とともに、浜松市井伊谷において、戦国期井伊氏の城館と城下に関する地籍図と村絵図の調査と現地踏査を行った。

・3月26日～28日

山村は、学部生・院生とともに、駿河・遠江の中近世城郭・城下町（掛川・諏訪原城・金谷・島田・駿府・丸子城・田中）の巡検を行った。

・4月1日

Stuewe Annalena（ライデン大学大学院生）が大学間交流により留学し、小島が受け入れ教員となった。

小島は教育研究評議会評議員、副研究科長に就任した。

・4月7日

平成28年度の大学院入学式が開催された。本年度は、修士課程に王琪薇、北西諒介、米田剛（指導教員小島）、金澤良輔（指導教員山村）が入学した。博士後期課程に劉天野（指導教員小島）が進学した。

・4月14日

『地理・地図資料』2016年度1学期号（帝国書院）に、小島の「中国の一人っ子政策の転換」（7-10頁）が掲載された。

・4月21日

『孫文研究』第57号に以下の共著論文が掲載された。柴田陽一・石田曜「孫文『建国方略』における「東鎮」と吉林省松原市のアイデンティティ」（43-65頁）。

・5月10日

山村が論文を分担執筆（「戦国城下町の景観と「地理」—井口・岐阜城下町を事例として—」217-248頁）した『日本古代・中世都市論』（仁木宏編、吉川弘文館）が出版された。

・5月21日

上海師範大学で開催された中国城郭都市諸相与城市歴史形態学研究会（第14次研究会）において、以下の発表が行われた。潘藝心「南京城門の視座からみる近代南京の変遷（1903-1949）」（原題「以南京城門為視角看近代南京の変遷（1903-1949）」）。

・5月26日

山村は、古戦場公園再整備基本計画策定有識者会議（長久手市）に出席し、計画策定について意見を述べた。

・ 5 月 29 日

神戸市立工業高等専門学校で開催された兵庫地理学協会 2016 年度春季例会において、以下の発表が行われた。石田曜「中国の都市公園における余暇の実態と特徴―瀋陽市、長春市を事例に―」。

哈爾濱工程大学で開催された興海論壇において、以下の発表が行われた。潘藝心「南中国海諸島紛争の解決方法に関する考えおよび国連海洋法条約の島制度に対する検討」（原題「南海島嶼争端解決思路探析与連合国海洋法公約有関島嶼制度規定之探討」）。

・ 6 月 18 日・19 日

山村は、金沢市で開催された科研研究集会「中近世移行期前田家領国における城下町と権力―加賀・能登・越中―」に参加した。

・ 7 月 7 日

山村は広島市立舟入高校において、「新旧地形図にみる広島戦後の復興」と題して授業を行った。

・ 7 月 9 日

山村は、平成 28 年度地図講演会（岐阜県古地図文化研究会主催、於岐阜県図書館）において、「地図から考える戦国城下町岐阜」と題した講演を行った。

・ 7 月 11 日

山村は、関市教育委員会の調査の一環として、中近世関の刃物産業と景観との関連について現地踏査を行った。

・ 7 月 24 日

小島が研究代表者となる集落再編科研（「集落再編の国際比較と生活空間論による再考」基盤研究 A）が採択され、第 1 回研究集会がメルパルク京都で開催された。

・ 7 月 25 日・11 月 14 日

山村は、岐阜県文化財審議会（岐阜県教育委員会）に出席し、同県の文化財の指定について討議を行った。

・ 8 月 4 日

山村は岡山県立津山高校の京都大学研修において、「今と昔の地形図を読む―津山城下町から現代の津山へ―」と題して授業を行った（高校 2 年生 13 名）。

・ 8 月 6 日～17 日

小島は華南科研によるフィールド調査に参加し、広東省江門市で農村調査を行った。

・ 8 月 8 日

山村は、長久手市文化財審議会（長久手市）に出席し、同市の文化財の指定について討議を行った。

・ 8 月 16 日

山村は、長久手古戦場野外活動施設運営委員会（長久手市）に出席し、古戦場公園再整備基本計画策定について討議した。

・ 8 月 19 日～21 日

山村は、中日韓地方学の理論と実践シンポジウム（北京連合大学北京学研究所主催）に参加し、20 日に「1000 年の都・京都の変遷―京都の歴史地理を探る―」と題した発表を行った。

・ 8 月 21 日～25 日

中国北京で The 33th International Geographical Congress（国際地理学会議）が開催され、以下の発表が行われた。小島 'Economic Development and Cultural Change in rural Guangzhou'。山村 'The Transforming Processes of Kyoto, the Millennium Capital of Japan'。

・ 8 月 29 日

山村は、二俣城跡・鳥羽山城跡調査検討会（浜松市）に出席し、調査について指導助言を行った。

・ 8 月 31 日

四條畷高校の京都大学キャンパスツアー一行が来校し、小島が総合人間学部に関する講演を行った。

・9月11日～14日

北海道札幌市のニューオータニイン札幌、ネストホテル札幌駅前で開催された“The 11th Japan-Korea-China Joint Conference on Geography”において以下の発表が行われた。Yuki NAGASHIMA “The Migration Pattern of Laborers in Kyoto and its Surrounding Regions during the Mid-19th Century”. Tomoko TAKEBAYASHI “Characteristics of School Trips in Recent Japan”. Haruhiko TANIGUCHI “The Multiplicity of Regional Layers in Agricultural Water Use in Osaka: The Differences in Administrative Assistance for Maintenance of Facilities for Irrigation”.

・9月23日

潘藝心は、上海師範大学で開催された中国城郭都市諸相与城市歴史形態学研究会（第17次研究会）において、コメンテーターをつとめた。

・9月28日・29日

山村は、集中講義「地域空間論ⅡB（地域構造論2）」の一環として、彦根市教育委員会文化財課の協力と案内を得て、戦国期佐和山城・城下町と近世彦根城・城下町の巡検を企画・実施した。

・10月16日

山村は、二俣の城下町探訪講座講演会（浜松市主催、於浜松市天竜壬生ホール）において、「古地図が語る二俣城下町」と題した講演を行った。

・11月11日～13日

人文地理学会2016年度大会が京都大学吉田南キャンパスで開催され、小方、小島、山村が、学内他部局の先生方、本研究室の元教員の方々とともに会場校委員として運営に当たった。本研究室の院生・学生も会場校スタッフとして運営をサポートした。

この学会においては以下の発表が行われた。

潘藝心「計画経済期における南京の工業用地の拡大」。劉天野「中心市街地における商業分布

の日中比較研究－長春と京都を例として－」。また、12日の特別研究発表において長島雄毅が書記を務めた。

・11月12日

Guy M Robinson（University of Adelaide）教授を迎えて、“Land, Housing and Farming on the Peri-Urban Fringe: Recent Developments in the UK and Australia”と題する講演を、人文地理学会大会にあわせて開催した。

・11月19日・20日

山村は、米子市で開催された科研研究集会「中近世移行期山陰東部における都市・地域・権力－因幡・伯耆・出雲－」に参加した。

・11月21日

山村は、史跡岐阜城跡整備専門委員会（岐阜市教育委員会）に出席し、調査について指導助言を行った。

・11月22～24日

台湾・台南大学の黄宗顕校長ら幹部が京都大学を訪問した。22日には杉山雅人人間・環境学研究科長との懇談がもたれた。24日には、中嶋節子人環・学際教育研究部長、COC事業「COCOLO域」代表の高見茂教育学研究科長、北野正雄理事・副学長との懇談がもたれた。地域空間論分野の博士修了生である林春吟助理教授が通訳などを務め、小方を中心として応接に当たった。

・11月27日

山村は、二俣の城下町探訪講座まちあるき（浜松市主催）において、午前・午後2コースの巡検を企画し、講師を務めた。

・12月2日

山村は、史跡長久手古戦場保存活用計画策定委員会（長久手市）に出席し、計画策定について討議した。

・12月3日・4日

山村は、可児市で開催された科研研究集会「中世・近世移行期における美濃の様相－拠点的な場の形成と変容－」に参加した。

・12月9～12日

小島は集落再編科研の打ち合わせと資料収集のため、中国南京に出張した。

・12月9～13日

上海師範大学・浙江省安吉県で開催された「江南地区における都市形態と市鎮文明史」研究会・中国城郭都市諸相与城市歴史形態学研究会 2016 年年会（第 19 次研究会）において、以下の発表が行われた。潘藝心「安吉地区の都市形態と市鎮構造に関する考察」（原題「安吉地区都市形態与市鎮格局初探」）。また、潘藝心は当該研究会においてコメンテーターをつとめた。

・12月18日

小島は華南科研の国際ワークショップ「フィールド調査に基づいて中国江門の地域構造を考える」をキャンパスプラザ京都で開催した。

地域と環境 No.14 2016. 12

編集・発行 「地 域 と 環 境」研 究 会
京都大学大学院人間・環境学研究科
文化・地域環境論講座 地域空間論分野
〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町
TEL.075-753-2894 FAX.075-753-7856

発 行 日 2016 年 12 月 28 日

印 刷 所 株式会社 田中プリント
TEL.075-343-0006 FAX.075-341-4476